

第68回読書週間

特別インタビュー

電子出版の現状と展望



日本電子出版協会(JEPA)

関戸 雅男会長

出版市場が低迷を続ける中、電子書籍は年々市場拡大が続いている。スマートフォン等の普及が後押しをし、若者を中心に電子版で漫画を読む人々が一般的となってきた。半面、小説をはじめとした文芸書や雑誌などでは遅れている。図書館での電子書籍も欧米諸国に遅れをとっている。海賊版対策や来年から改正著作権法対策など、課題も少なくない。電子出版の現状と展望について、普及拡大に長年取り組んできた日本電子出版協会(JEPA)の関戸雅男会長に話を聞いた。



関戸雅男会長のインタビューは、11月7日(金曜日)の特別インタビューです。

——まずは電子書籍の現状について。文芸書などのラインアップが少ないイメージがあります。

関戸会長 読者の立場からすると、読みたい本がなかなか電子化されないという感覚があるのではないか。

また、作り手の立場からも課題がある。私の所属する研究社では外国語の辞典と、語学などの学習書、専門書を出しており、私は一九九〇年頃から辞書などの電子化を推進することに携わってきた。学習書の中でも語学書では音声のCDが添付されるのが通常だが、音声再生を統合的な環境として実現している閲覧ソフトがあまりないので、音声は別途ダウンロードとするか提供を断念せざるを得ないのが現状だ。

また、図版の入った本などはレイアウトを工夫しているが、電子化するとその体裁が変わってくる。紙版の組版の体裁で辻褃を合わせていたところがすんなりといかず、手を加えないといけないことがよくあり、その手間がもう少し簡便になれば良い。この他にも電子化の処理を始めてから出てくる問題もあり、紙の本と電子版を足並みそろえて出すとなると、制作体制を強化しなければならぬ。紙版の校了後にどの程度の時間が必要か検証も必要だが、そのプロセスは確立されていないし、そもそも電子版のニーズが計りがたい。当社は印刷会社（研究社印刷）を子会社として持っているので、制作時の意思疎通は比較的やりやすいのだが、それでも工程の調整が難しい場合がある。

電子書籍は著者との関係も考慮する必要がある。電子化に積極的な著者ばかりではなく消極的な方もおられる。共著になっていて本では、全著者に許諾を求める必要がある。当社刊行物に限れば、著者の反対が電子化のネックとなったことはあまりなかった。以前は電子化に関して事前に契約を結ぶことはほとんどなかったが、最近では事前に極力、著者と話をするようにしている。

電子出版に関する契約について、すべての編集者が一定の知識を持つようになることも課題だ。

——電子出版を読む手段として専用端末、タブレット、スマートフォンが混在しています。

関戸会長 私は電子書籍のユーザーとして、どれも使用経験がある。各端末それぞれ一長一短があり、読者がどれを選ぶかは何をどのよう読むかによるだろう。私は電子版で読むのは英文の小説が多く、移動時の利用が多いので、携帯しやすいスマホが便利で愛用している。スマホは画面が小さいのが難点だとの指摘もあるが、小説などを読む分には小さすぎるとは感じない。一方、自宅などで腰を据えて読む場合には、画面の大きいタブレットや専用端末が適している。どの端末が主流になるかは、価格などの要素もあり予測が難しい。自分を標準的な読者と考えればスマホが有望だが、読む本によっても異なる。

スマホの弱点をひとつ挙げると、私の持つ機種が古いからかもしれないが、英語の本で辞書を引く際の反応、特にテキストに戻るときが遅い。スマホのレンダリング（情報処理）の速度が遅いと思う。

——来年一月の著作権法改正で電子出版についても出版権設定ができるようになります。

関戸会長 今度の改正で現状がそれほど大きく変わることはないのではないかと。著者がオリジナルの本とは別の出版社や新規の事業者から電子版を出したいとの意向を示す事態が頻繁に起こるようならば困り込みが必要になるが、そのようなケースは限定されると思う。著者との間に円満な関係を構築できていて、出版社が電子出版にもきちんと取り組んでいけば、著者もあえて別の事業者から電子版を出そうと考えることは少ないだろう。とはいえより好条件を提示するライバルが出現する可能性は否定できないので、その意味では出版社が今まで以上に著者が満足できるサービスの提供を心がけなければならない。

——電子書籍の普及でこの他に影響はありませんか。

関戸会長 同じ本の、紙版と電子版の両方を購入する人は多くはない。電子版の価格は通常、紙の本よりも安く設定されているので、販売部数が同じならば売上金額は下がる。現状では電子書籍のシェアが小さいので問題化していないが、他産業のピフオーアフターの事例をみて研究しないといけない。

また、紙の本は初刷りを取次会社経由で書店に並べた時点で売り上げを立てることができ。一方、電子書籍には何部配本という概念がなく、実際に読者が購入して初めて売り上げが立つため、刊行時に期待できる売り上げが相対的に低い。著者に売上払いに理解をもってもらい必要があるが、そうは言っても刊行時にそれなりにまとまった金額を支払う必要があると思う。電子書籍主体でやっていくには資金力に余裕が必要だ。結果として紙版の支えのある売れ筋の本に電子化が偏ることになる。今までの流通にはその点でファイナンスの機能もあったが、現状では電子書籍の領域にはそれがなく、電子化が進まない一因になっているのではないかと。

いずれ紙を前提としない本も出てくると思うが、それが大勢を占めるのは先の話だと思う。

——海賊版対策については。

関戸会長 昨年、悪質な会社がDRM（デジタル著作権管理）回避ソフトを販売したことで有償コンテンツの違法コピーがネット上に相次ぎ流出し、多数のJEP A会員が損害を被った。当該企業幹部が今年二月に逮捕されたが、こうした悪質業者の登場で事業が大きな影響を受けることは予測しなかった事態だ。

JEP Aのできることは、著作権に関する啓蒙活動と、個別案件に助言をすることに限定される。海賊版が海外で制作されているケースもあり、取り下げを依頼しても反応が乏しいことが多い。海賊版による影響は当社に限ればこれまでのところ甚大というほどではないが、備えが必要な問題ではある。

豊かな創作活動を維持するには著作権へのリスクペクトが必要なことに理解を求め、リスク覚悟でやっているのが有効だと思う。海賊版を出す人の中には確信犯もおり、費用対効果の問題もある。いちごっこになる可能性もある。DRMで対策しているが、ユーザーには概して不評だ。コピーが容易だからといって不正行為はしないと、社会的合意がないと出版自体が成り立たなくなる。

——図書館への普及についてはどう考えますか。

関戸会長 海外と比較すると、日本では公共図書館への普及が遅れているのは事実

だ。ただ、図書館の位置付けが国ごとに違うこと、米国などは国土や人口に比して書店数が少ないことも一因だろう。

J E P A では、全会員の総意ではないが、図書館に普及を図りたいと考える会員は多いと思う。

図書館で電子書籍が利用できれば、読者の利便性が高まることは間違いない。図書館の利用資格がある人が自宅で電子書籍にアクセスして読むことができるようにすることも可能だ。社会の高齢化が進んでいるが、自宅や入院先の病院で蔵書の確認や予約だけでなく、貸出までできると良い。そうなると図書館利用者は今までよりも増えるだろう。メディアの特性として、コピーが一つあれば同時に何冊でも貸し出せる。電子化された図書館をどう運営するかは図書館サイドの課題である。電子書籍に限れば図書館がいくつも必要なのかという疑問も生じる。一方で出版社の売り上げに影響は出るだろうから、著作権者、出版者、図書館、利用者それぞれが納得のできる仕組みを作らないといけない。検討は始まったばかりで、仕組み作りには相当の時間がかかるだろう。

現状では利用者から電子書籍の充実を求める声は少ないと思うが、多くなつて来れば図書館側も対応せざるを得ない。その時にちゃんとしたビジネスモデルがないと困ったことになる。普及率が低い今のうちに検討に着手し、修正点を修正しながら、ビジネスモデルを確立していくべきだと思う。読者が読みたい本が少ないという現状に対し、供給側の出版社も多少のリスクをとってリードする姿勢がないと、難しいだろう。

昨年には K A D O K A W A、講談社、紀伊國屋書店の三社によつて日本電子図書館サービス（J D L S）が設立され、実証実験も開始しており、参考にできる結果が得られることを期待している。

海外の事例では、規定の回数以上の貸出実績がある電子書籍については図書館がもう一冊購入するとか、蔵書として置いておく期間を延長する場合は一定料金を支払うなどし、出版社の利益を担保している。

——海外と比べて日本が優れる点はなんでしょう。

関戸会長 日本の紙の本は、欧米の本よりも総じて造本や装丁の出来が良いと言われる。同様に、電子化された本についても、作る側も受ける側も品質に関して要求水準が高いと思う。海外では誤字の多い電子書籍が売られていることもまれではないと思うので、スキャンしただけで校正がなされていないのではないかな。

国際標準プラットフォーム「E P U B 3」で縦書きルビが実現し和書の電子化に追い風となったが、それ以前は二の足を踏んでいた出版社も多かった。品質の追求は業界の視点だけでなく、読者サイドの視点でどう見えているかも重要。業界側が気にしていないでも、読者側は気にしていないこともある。

米国で電子書籍が爆発的に普及したのは、アマゾンの影響が大きいと言われている。米国では一つのタイトルがハードカバー、ペーパーバック、オーディオブック、電子書籍の四種類から選択できる本も多い。それに加えて古書もあり、価格も多様だ。著作権の切れた古典などは大量に電子化されて非常に安い価格で購入できる。同様に、日本にもボランティアで運営する青空文庫が電子書籍のラインアップを拡充してい

る。読者は常に新しい著作物だけを読むわけではない。紙の本を読むか、電子書籍を読むかは、最終的には読者の選択に委ねられているが、業界側が方向をリードするような姿勢にならないと電子化は進展しない。

——電子書籍には、文字サイズの拡大・縮小などの機能で読みやすく工夫されたものもあります。

関戸会長 電子書籍は、文字サイズや行数などが変えられる「リフロー」型とPDFのような「固定レイアウト」型に大別でき、それぞれ一長一短がある。リフロー型は見え方を変えられるのが利点だが、構成が版面に依存する本の電子化には手間がかかる。図版と本文の位置がずれたりすれば読者は違和感をもつし、制作側としても気が悪いといった問題がどうしても出てくる。紙版を踏襲した固定レイアウトの場合は、スマホなど小画面の端末では文字が小さくなりすぎる。

また、使い勝手のいい閲覧ソフトができるかどうかも大切だ。ビューワー（閲覧ソフト）製作者も良いものを作ろうとしているが、いざ製品ができてみると不満な点も見つかると。新しいビューワーがどんどん出てくると、ユーザーはソフトウェアのアップグレードをするだけで済めばよいが、機器の買い替えなどになれば億劫だ。最近では自動で更新されるソフトも多く、更新前の方が良かったとの声も出てくる。ただ、大半の人は多少の不満があっても、メリットが大きければそのソフトを使う。

——若者が読書離れしていると言われています。

関戸会長 本当に読書離れが進んでいるのか、若者に限ったことなのかは不明だ。読書離れの一因として読書には時間がかかることが挙げられる。限られた時間を使うのにほかにもっと楽しいこと、効率的な方法があればそちらが選ばれる。競争が避けられないのであれば、読書の世界に商品・製品を供給している事業者がそれを意識して頑張るしかない。

読書は生活習慣の一つでもある。小さい時から読書の習慣をつけていない人が、年齢を重ねてから急に目覚めて読書をするようになるとは考えづらい。もちろん、若い時にアウトドア活動に夢中だった人が、体力が落ちて読書に目を向ける可能性は皆無ではないが、読書が大切と思う人たちは学校や家庭で、子どもの成長段階に読書を習慣付ける活動をしているだろう。

最近の子どもたちはゲームや読書以外のスマホの利用に相当の時間を割いている。若い人の時間の過ごし方が多様化しており、各自が時間のやり繰りをしている結果として、読書のウェイトが減ってくるということも起こる。親などの指導が可能ならうちに読書を好むようにすればよいが、圧倒的に面白いことが他にあれば、それをやめさせてまで本を手にとらせるには大変な忍耐が必要になる。人が何をして過ごすかは、最終的には自ら決めることだ。SNS（インターネット上のオンライン・コミュニティ）は読んだり、書いたりなど時間がかかるため、もしSNSに無縁ならばそれに費やす時間が読書にあてられたかも知れない。また、経済面で通信費にお金がかかり過ぎて本を買えないということもあるかも知れない。若者に読書を習慣づける地道な努力の継続が大切だが、最終的には出版業界が読みたくてしかたがないと思わせるものを作るしかない。

——JEP Aの取り組みを伺います。

関戸会長 JEP Aは活動組織として各種委員会を設けており、著作権や電子図書館など、その時々の課題に取り組んでいる。電子出版の活性化がその主目的であり、出版社だけでなく電子機器メーカー、流通業者、ソフトウェア会社、データ処理会社、印刷会社なども加入しており、業界内の各セクター固有の問題を取り上げ、その調整もしている。業界団体として、この分野を通じて社会に貢献できればと願っている。

フォーマットに関しては、近年はEPUBの普及で成果を上げ、現在はデジタル教科書の国際標準「EDUPUB」の普及に積極的に取り組んでいる。公共図書館への電子書籍普及についても、どのようなビジネスモデルが考えられるか、検討を続けてきた。

また、電子出版で先行している海外などの事例を紹介するセミナーを開き、啓蒙を図っている。例えば四日に電子図書館に関するセミナーを開催し、電子図書館が普及している米国の例を紹介した。

——電子出版の将来性については。

関戸会長 電子書籍の市場は今後も徐々に拡大していくと思う。若年層は電子機器で文字を読むことに馴染んでおり、電子書籍を当たり前のものとして受け入れられる社会が遠からず来るだろう。一般向けの本の市場は大きなトレンドとして電子化が徐々に進んでいくと思うが、教育分野に限れば行政当局が電子化を進める意図で動けば、一気に状況が変わる可能性がある。

辞典は一足先に電子化が進んだが、私の経験から言えば、われわれの業界はこれからも変化に対する備えをしておく必要があると思う。電子版の辞典は紙に比べ、総じてメリットが多いとみなされたから、あれだけの市場を作ることができた。現在、電子版の辞典市場は足踏み状態になっているが、実需のレベルに落ち着きつつあるとみている。成長の時代が終わり、一定レベルで飽和したのであり、少子化が進めば縮小に転じることが危惧される。

電子出版の形態としては、ネットサービスは今後も拡大するだろうと。自社の電子出版物を月々いくらで読めるというサービスをした場合にどの程度の利用者がいるかは、やはりやってみないとわからない。今は新しい試みをやりやすい時期ではある。

私は外国の書籍を購入したりもするが、注文してから届くまでに一週間程度かかるのが一般的だ。電子書籍は瞬時にダウンロードできるのがメリットだと思う。東京にいとあまり感じないが、地方在住でも電子書籍はすぐに入手して読めることがメリットだ。取次会社も配送の迅速化に努めているが、配送業者がどこまでついていけるのか不安はある。

一つ心配しているのは、これまで出版社と一緒に仕事をしてきた書店が、電子化にどう対応していくかということだが、万全と思われる対応策がない。

——最後に関戸会長の読書体験談をお聞かせ下さい。

関戸会長 私は子どもの頃に平凡社の国民百科事典を隅から隅まで熱心に読んだ。小学校高学年の時に出会い、子どもの知的好奇心によく応えてくれた。当時は今ののように塾やゲームやテレビに時間を取られることはなく、昼は外で遊び夜は読書の時間がたっぷりあった。

今でも文字を読むのは好きで月に四、五冊の本を読む。表現のディテールが面白い作品が好きで、ゆっくり味わう。通勤に往復一時間ほどかかるので、その時間はたいい電子書籍を読んでいる。芥川龍之介や中島敦など大正、昭和初期の作家が好きで、青空文庫を利用することも多い。

電子書籍が便利なのは何冊分も携行できることだが、たまに充電を忘れることがあり、そうした事態に備え、紙の本も常にカバンに忍ばせている。◇